

学位論文要旨

課題解決型談話の意見調整における確認要求表現の連鎖構築

—日本語母語話者と中国人上級日本語学習者を対象に—

広島大学大学院 教育学研究科
教育学習科学専攻 博士課程後期
D181751 王詩凝

I. 論文題目

課題解決型談話の意見調整における確認要求表現の連鎖構築—日本語母語話者と中国人上級日本語学習者を対象に—

II. 論文の構成（目次）

第1章 序論

- 1.1 問題の所在と本研究の目的
- 1.2 本論文の構成

第2章 先行研究と本研究の研究課題

- 2.1 確認要求表現の用法
 - 2.1.1 各形式に固有の用法
 - 2.1.2 互換性から見た確認要求表現の用法
- 2.2 確認要求表現の談話機能
 - 2.2.1 各形式の談話機能
 - 2.2.2 使い分けから見た確認要求表現の談話機能
- 2.3 課題解決型談話の意見調整における確認要求表現の使用傾向
 - 2.3.1 日本語母語話者の使用傾向
 - 2.3.1.1 確認要求表現の談話中の出現位置
 - 2.3.1.2 意見調整の開始部における連鎖構築
 - 2.3.1.3 意見調整の主要部における連鎖構築
 - 2.3.2 日本語学習者の使用傾向
 - 2.3.2.1 確認要求表現の談話中の出現位置
 - 2.3.2.2 意見調整の開始部における連鎖構築
 - 2.3.2.3 意見調整の主要部における連鎖構築
- 2.4 先行研究に残された課題と本研究の研究課題

第3章 研究方法

- 3.1 分析資料と調査対象者
- 3.2 文字化とコーディング
- 3.3 分析対象

第4章 課題解決型談話の意見調整における確認要求表現の出現位置

- 4.1 分析方法
- 4.2 分析結果
 - 4.2.1 日本語母語話者の使用傾向

4.2.2 日本語学習者の使用傾向

第5章 意見調整の開始部における確認要求表現の連鎖構築

5.1 分析方法

5.2 分析結果

5.2.1 連鎖の種類

5.2.1.1 日本語母語話者の使用傾向

5.2.1.2 日本語学習者の使用傾向

5.2.2 展開パターン

5.2.2.1 日本語母語話者の使用傾向

5.2.2.1.1 方向づけの局面

5.2.2.1.2 評価づけの局面

5.2.2.2 日本語学習者の使用傾向

5.2.2.2.1 方向づけの局面

5.2.2.2.2 評価づけの局面

第6章 意見調整の主要部における確認要求表現の連鎖構築

6.1 分析方法

6.2 分析結果

6.2.1 連鎖の種類

6.2.1.1 日本語母語話者の使用傾向

6.2.1.2 日本語学習者の使用傾向

6.2.2 展開パターン

6.2.2.1 日本語母語話者の使用傾向

6.2.2.1.1 可決局面

6.2.2.1.2 修正局面

6.2.2.1.3 相談局面

6.2.2.2 日本語学習者の使用傾向

6.2.2.2.1 可決局面

6.2.2.2.2 修正局面

6.2.2.2.3 相談局面

第7章 総合考察

7.1 日本語母語話者の特徴

7.1.1 「よね」の使用

7.1.2 「じゃないか」の使用

7.2 中国人上級日本語学習者の特徴

7.2.1 確認要求表現の使用

7.2.2 質問文の使用

7.2.3 平叙文の使用

第8章まとめと今後の課題

8.1 まとめ

8.2 今後の課題

参考文献

Ⅲ. 論文要旨

第1章 序論

1.1 問題の所在と本研究の目的

日常生活の中では、異なる意見を持つ相手と課題の解決を目指して合意を形成するために、互いに意見調整を行う場面が見られる（大和，2009）。このような場面では、「よね」「じゃないか」「だろう」といった確認要求表現が多用されるが、その際には、談話レベルで連鎖が構築されていくことになる。

従来、連鎖構築に関しては、特定の部分や局面について研究がなされてきたが、意見調整の全体構造から見ると、談話の部分や局面によって話し合われる内容が異なるとともに、連鎖構築のされ方も異なると考えられる。談話の各部分や局面に見られる連鎖構築の全体像を明らかにすることは日本語教育にとっても重要である。また、確認要求表現を会話の中で適切に運用できるようになるためには、学習者の母語の要因を考慮しつつ、母語話者と学習者の使用傾向の異同を把握する必要がある。

そこで、本研究では、課題解決型談話の意見調整場面において、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者がそれぞれどのように確認要求表現によって連鎖を構築するかを明らかにすることを目的とする。

1.2 本論文の構成

本論文は全8章で構成される。第1章と第2章では、本研究の目的を述べるとともに、先行研究を検討し、研究課題を提示する。第3章では、本研究の分析資料について説明する。第4章では、意見調整における確認要求表現の出現位置について明らかにする。その上で、【開始部】（第5章）と【主要部】（第6章）に着目し、確認要求表現によってどのような連鎖が構築されるかを分析する。第7章では、母語話者と学習者のそれぞれの使用傾向に関して総合考察を行う。第8章では、本研究の結論をまとめ、今後の課題を述べる。

第2章 先行研究と本研究の研究課題

2.1 確認要求表現の用法

2.1.1 各形式に固有の用法

各形式には共通の用法もあれば、それぞれに固有の用法もある。この点について、先行研究の指摘を概観した。

2.1.2 互換性から見た確認要求表現の用法

確認要求表現に関しては、意味・用法と形式間の互換性を記述する研究がなされてきた。しかし、日本語学習者の立場から考えると、これらの形式の適切な運用につなげるためには、それらの意味・用法が実際の会話において「いつどの位置で用いられるか」という文脈を具体化する必要があると考えられる。

2.2 確認要求表現の談話機能

2.2.1 各形式の談話機能

日本語母語場面の雑談における「よね」の機能は「共感的会話を作り上げるために、共感の表示と要求が共存する」とまとめられている（張，2009）。一方、「じゃないか」には「話題の提示・展開機能」が最も多く見られることが明らかにされている（張，2010）。

2.2.2 使い分けから見た確認要求表現の談話機能

談話レベルでは、自然会話などにおける確認要求表現の各形式の機能が分析されてきたが、自然談話に見られるこれらの機能が課題解決型談話にも見られるかどうかについて、さらに検討する必要がある。

2.3 課題解決型談話の意見調整における確認要求表現の使用傾向

2.3.1 日本語母語話者の使用傾向

確認要求表現の談話中の出現位置に関して、否定的応答では「問題点」の提示の際に「だろう」（伊藤，2019）、「初出提案」に言及する際に「よね」「んじゃないかな」「じゃない？」（野原他，2002）がそれぞれ見られることが指摘されている。しかし、談話の全体構造から見ると、それらの構成要素が談話のどの部分や局面に見られるかについては明らかにされておらず、日本語教育の観点からはさらなる分析の必要性がある。

意見調整の開始部における連鎖構築に関して、新たな提案を導き出すための準備段階としての開始部において、共通認識を確立させることが重要であると指摘されている（伊藤，2019）。しかし、何についての共通認識かによって、構築される連鎖の種類と展開パターンが異なると予想される。この点について、細分化してさらに分析する余地が残されている。

意見調整の主要部における連鎖構築に関して、梶本（2000）では、相談局面において「自発型」の連鎖タイプが見られることが明らかにされている。伊藤（2019）では、「よね」などの確認要求表現の使用が見られることが指摘されているが、それらの形式が用いられる際にどのように連鎖が構築されるかは明らかにされていない。

2.3.2 日本語学習者の使用傾向

確認要求表現の談話中の出現位置に関して、伊藤（2019）では、学習者は「ね」を用いて相手の提案内容に対して意見を表明し、相手から反応を得ようとする様子が観察されたが、相手に反論する際にも「ね」を使ってしまうことが見られたという。

意見調整の開始部における連鎖構築に関して、水野他（2019）では、中国人上級日本語学習者には意見の行き詰まりが生じた後、結論に直結する談話展開が見られることが明らかにされている。他方、主要部において、野原他（2002）は、前置き発話をした後に提案する場合、「じゃない？」や「よね」によって相手に確認や意見表明を行うという傾向が日本語学習者には見られないと指摘している。

2.4 先行研究に残された課題と本研究の研究課題

先行研究に残された課題をふまえ、本研究では、以下の三つの研究課題を設定する。

- 研究課題 1 意見調整が行われる際に、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者に用いられる確認要求表現の出現位置には、どのような特徴が見られるか。（第4章）
- 研究課題 2 意見調整の【開始部】において、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者による確認要求表現の連鎖構築には、どのような特徴が見られるか。（第5章）
- 研究課題 3 意見調整の【主要部】において、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者による確認要求表現の連鎖構築には、どのような特徴が見られるか。（第6章）

第3章 研究方法

3.1 分析資料と調査対象者

本研究では、日本語母語話者どうし16組の課題解決型談話（男性どうし8組、女性どうし8組）、中国人上級日本語学習者と日本語母語話者16組の課題解決型談話（男性どうし8組、女性どうし8組）合計32組の音声データをロールプレイで収集した。調査対象者は全員X大学に所属する大学生もしくは大学院生である。日本語学習者は日本滞在歴が1年以上で上級レベル（N1取得）の大学院生である。

3.2 文字化とコーディング

録音された会話は日本語母語話者1名によって文字化された。構成要素および談話構造の認定に関して、最終的に日本語母語話者2名の一致率が90%以上に至ったため、データの信頼性は保証されていると言える。

3.3 分析対象

大和（2009）に基づいて、「意見調整場面」を「意見の相違が表面化した後に、話者が相手に歩み寄りつつ、協働して意見を一致させていく過程」として認定し、抽出した。確認要求表現に関しては、蓮沼（1993）や宮崎（2002）に基づいて、「よね」「だろう」「じゃないか」「んじゃないか」4種類を分析対象とした。

第4章 課題解決型談話の意見調整における確認要求表現の出現位置

4.1 分析方法

意見調整場面の各部分と局面における確認要求表現の出現数を調べるとともに、確認要求表現によってどのような構成要素に言及されるかを分析し、構成要素の割合を調べる。

4.2 分析結果

4.2.1 日本語母語話者の使用傾向

【開始部】において、どこが論点であるかを明確にする「方向づけ」の局面では、「問題」に「よね」が付加されやすい。また、【主要部】の修正局面において、「よね」と「じゃないか」は「問題」に付加されることが多いが、「提案」に言及する際にも見られる。

4.2.2 日本語学習者の使用傾向

【開始部】において、原案に対してある論点をもとに吟味する「評価づけ」の局面では「賛成」や「提案」の言及が日本語母語話者に比べて少ない。同様に、「方向づけ」の局面における「問題」の言及の際にも、学習者による「よね」の使用は日本語母語話者と比べて少ない。【主要部】の修正局面において、「問題」に言及する際に「よね」の使用が見られるが、「提案」に言及する際には「よね」があまり見られない。

第5章 意見調整の開始部における確認要求表現の連鎖構築

5.1 分析方法

まず、内容面から連鎖の類型を検討し、確認要求表現によって構築される連鎖を抽出し、それぞれの類型の連鎖の出現数と出現割合を調べる。次に、類型別に見られる展開パターンの出現数と出現割合を調べる。最後に、日本語母語話者と日本語学習者にそれぞれ多く見られた連鎖の類型と展開パターンを調べ、異同をまとめる。

5.2 分析結果

5.2.1 連鎖の種類

日本語母語話者が「問題」に言及する場合には【提案内容に関する方向づけ】という連鎖、「賛成」に言及する場合には【相手の立場のみに有利な評価づけ】という連鎖がそれぞれ構築されやすい。一方、日本語学習者が「問題」に言及する際には、日本語母語話者に多く見られた【提案内容に関する方向づけ】は見られず、【提案のあり方に関する方向づけ】にその使用が偏っていた。

5.2.2 展開パターン

日本語母語話者には、【提案内容に関する方向づけ】が構築される際に、〈問題一言い換え・繰り返し〉に続いて再び「問題」が「よね」によって言及され、新たな具体案が導かれるというパターンが見られやすい。また、【相手の立場のみに有利な評価づけ】において、「よね」によって相手の提案に対する賛成が示された後、精緻化要求が行われたり、再度の賛成が表明されたりするパターンが見られた。

一方、日本語学習者の場合には、「方向づけ」の局面で「よね」によって「問題」への言及が行われた後、原案への偏りや新たな具体案が母語話者によって展開されていく。また、【相手の立場のみに有利な評価づけ】が構築される際に、日本語母語話者に多く見られた精緻化要求のパターンは見られなかった。

第6章 意見調整の主要部における確認要求表現の連鎖構築

6.1 分析方法

5.1と同様である。

6.2 分析結果

6.2.1 連鎖の種類

連鎖の種類に関して、日本語母語話者が修正局面で「提案」に言及する際には「よね」も「じゃないか」も見られるが、「よね」は【微調整】、「じゃないか」は【修正】においてそれぞれ現れやすい。一方、日本語学習者には、同じく修正局面で日本語母語話者に見られた【修正】は見られず、【微調整】という連鎖の中で「問題」に言及する際に「よね」の使用が見られた。

6.2.2 展開パターン

日本語母語話者において、可決局面で【直接可決】が構築される際には、相手に対する賛成が示された上で、「よね」によって提案が行われるという展開が見られる。また、修正局面で【微調整】が構築される際には、「問題」が相互に確認された後、「よね」によって修正案が導かれるというパターンが見られる。さらに、相談局面の【展開型】に関しては、「よね」によって話者間での〈情報—情報〉に続いて、「だろう」によって再度情報に言及され、提案が導入されるというパターンが見られた。

一方、日本語学習者の可決局面において、【直接可決】が構築される際に「よね」が見られたが、「よね」による「提案」の言及は1回のみである。また、修正局面において、「提案」に言及する際には確認要求表現の使用があまり見られず、問題をふまえないまま修正案が導入されるという日本語母語話者とは異なる展開が見られた。さらに、相談局面の【展開型】に関して、情報が学習者によって提示された後、母語話者によって提案が行われるという特徴が見られる。

第7章 総合考察

7.1 日本語母語話者の特徴

本研究では、従来明らかにされていなかった確認要求表現による連鎖構築の全体像が明らかになった。また、同じく談話の構成要素に言及する場合であっても、談話中での出現位置によって構築される連鎖が異なることも分かった。このような「よね」と「じゃないか」の使用は、第2章で見たような、それぞれの固有の用法と関わると考えられる。

7.1.1 「よね」の使用

「よね」には「聞き手ばかりでなく、話し手における知識の形成にも関わる」という「相互了解の形成確認」(蓮沼, 1995)の用法がある。開始部では、新たな方向性を導くために、「よね」が用いられることで、それまでの話し合いの要点が指摘されるとともに、それがその後の議論の根拠として取り上げられるという談話展開が実現される。また、修正局面においては、提案の理由・根拠が「よね」によって補強されており、話者間での共通基盤がより確固たるものになるため、微調整によって修正案に円滑につながることができると言えよう。

7.1.2 「じゃないか」の使用

「じゃないか」に関しては、「通常の認識能力をもっていれば、認識できて当然といった見込みに基づいて、聞き手に認識形成を要請する」(蓮沼, 1995)という用法が指摘されてい

る。このような用法と談話展開との関わりに関して、「じゃないか」が用いられる際の先行文脈に着目すると、相手の要求型発話やためらいがなされていることが共通して見られる。主要部の修正局面において、話者は相手に納得させるために、「じゃないか」によって修正案を導入するとともに、その妥当性に関してさらなる説明を行っているという談話展開が見られる。

7.2 中国人上級日本語学習者の特徴

本研究においては、日本語母語話者の使用傾向と比較することで、中国人上級日本語学習者の使用上の特徴についても明らかになった。

7.2.1 確認要求表現の使用

日本語母語話者と比べて、どの部分や局面においても、確認要求表現の出現数が少なかった。開始部においては、「よね」によって「問題」に言及しつつ【提案のあり方に関する方向づけ】という連鎖の構築が見られたが、新たな案が導入される前に〈問題一言い換え・繰り返し〉が複数回行われるという日本語母語話者に見られやすい展開は、学習者の会話には見られない。

7.2.2 質問文の使用

相談局面において、学習者には「よね」による「提案」への言及があまり見られず、上昇調の質問文の使用が見られた。質問文を用いて意見を提示するという述べ方は、その意見が適当かどうか疑問を持ちつつ述べるため、より間接的な意見の述べ方であると指摘されている（伊藤，2019）。

7.2.3 平叙文の使用

学習者は確認要求表現の代わりに、どの部分や局面においても、平叙文によって相手に対する賛成を表明したり、自らの提案の妥当性を主張したりしている。そのような使用傾向は、確認を重ねず、課題解決に直接関係するもののみを導入するという中国語母語話者の意見調整のプロセスにも関わると考えられる。

第8章 まとめと今後の課題

8.1 まとめ

本研究では、課題解決型談話の意見調整が行われる際に、日本語母語話者と中国人上級日本語学習者に用いられる確認要求表現の出現位置を明らかにした上で、開始部と主要部に着目し、確認要求表現の連鎖構築について分析を行った。その結果、開始部に関して、日本語

母語話者の会話では、【提案内容に関する方向づけ】が見られるのに対して、中国人上級日本語学習者の会話では、【提案のあり方に関する方向づけ】という連鎖が構築されやすいことが明らかになった。主要部に関して、日本語母語話者の会話では、修正局面においては「よね」によって【微調整】、「じゃないか」によって【修正】がそれぞれ構築されやすい。それに対して、中国人上級日本語学習者の会話では「よね」によって「問題」に言及する場合に【微調整】が構築されやすい。

本研究で明らかになった連鎖構築の特徴は各形式の固有の用法と関わりと考えられる。また、同じ場面において、中国語母語話者は確認要求表現を使用せず、他の形式で異なる連鎖を構築していることから、本研究で明らかになった日本語学習者の使用傾向は、学習者の母語である中国語の影響を受けている可能性がある。

8.2 今後の課題

まず、本研究では最終的に合意に至る談話を対象としたが、全体像を明らかにするために、「否決局面」とそこに見られる「反対」や「譲歩」についても分析する必要がある。また、確認要求表現を体系的に考察するために、本研究では言及しなかった「否定疑問文」や「ね」などについても分析するとともに、「じゃん」「やん」「じゃない？」のそれぞれのニュアンスの違いについても考察する余地が残されている。さらに、本研究では「同等・友人どうし」によるインフォーマルな場面を分析資料としたが、他の関係性やフォーマルな場面との比較を行う必要がある。いずれも今後の課題である。

参考文献

- 伊藤亜希 (2019) 「英語を母語とする日本語学習者の合意形成談話の特徴—「提案—応答」の拡張に着目して—」 広島大学博士学位論文
- 梶本総子 (2000) 「人間関係からみた課題解決の会話の連鎖構造」『世界の日本語教育』10, 221-239.
- 張恵芳 (2009) 「自然会話における「ヨネ」の意味類型と表現機能」『言語学論叢』28, 17-32.
- 張恵芳 (2010) 「自然会話における「デハナイカ」と“不是…吗”の表現機能の違い」『言語学論叢』29, 74-89.
- 野原美和子・藤江希子・宮谷敦美 (2002) 「提案から同意に至る会話の分析—日本語母語話者と日本語非母語話者の課題解決を目指す会話データを基に—」『岐阜大学留学生センター紀要』2001, 31-45.

- 蓮沼昭子（1993）「日本語の談話マーカ―「だろう」と「じゃないか」の機能―共通認識喚起の用法を中心に―」『第1回小出記念日本語教育研究会論文集』39-57.
- 蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田義雄（編）『複文の研究（下）』389-419, くろしお出版
- 水野瑛子・柴田龍希・俵山雄司（2019）「討論の行き詰まりに対する話題展開―日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較―」『日本語・日本文化論集』26, 35-55.
- 宮崎和人（2002）「確認要求」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃（編）『新日本語文法選書4 モダリティ』203-227, くろしお出版
- 大和祐子（2009）「意見の一致を目指す会話における意見交渉の過程―意見が異なる者同士の「歩み寄り」の始まりを中心に―」『言葉と文化』10, 59-75.
- 李霽芳・松崎寛（2009）「交渉場面における日本人と中国人の言語行動―母語場面と接触場面の量的分析を中心に―」『広島大学日本語教育研究』19, 55-62.